

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 朴 天弘

朴天弘（パク・チョンホン）氏の博士論文「現代日本語の「ハズダ」に関する考察 — 「知識確認形式」という観点から —」の審査結果について報告する。

本論文は、現代日本語の文末に現れる表現「～ハズダ」について、その様々な用法が一つの機能から統一的に説明可能であることを示したものである。従来の研究では、用法分類の判断基準が明確ではなく、用法間の関係もはっきり示されておらず、また推論の観点から分析しながらも、推論との関係が不明確であったり、推論過程がない用法を認めたりするなど、「ハズダ」の意味・機能を統一的に説明できていなかった。本論文では、「ハズダ」の使用条件を仮説として提示し、様々な用法がその使用条件によって統一的に説明できること、さらに「ハズダ」と類似する意味を持つ日本語の他の形式や韓国語で対応する形式「-(u)l kesita」と比較することにより、それらの表現と比較する上でもその仮説が有効であることを示そうとする。

本論文は9つの章からなり、第1章では、本論文の背景と目的の他、考察対象について述べている。第2章では、先行研究を「ハズダ」の意味・用法を中心に記述的に考察したものと、推論の観点から考察したものの2つに分けて検討し、(1)「ハズダ」の使用について統一的な説明がなされていないという点と、そのため(2)「ハズダ」の本来の性質を的確に説明できていないという問題点を指摘した。

第3章では、先行研究の問題点を分析し、それを克服するため、まず「ハズダ」の使用条件として、話し手の知識または話し手が予想・期待することと現状において何らかのズレが生じた場合、そのズレから生じた「疑問」を払拭するとき「ハズダ」が使われやすくなる、という仮説を立てた。さらに、「ハズダ」の意味・機能を、話し手が真だと思っている、または真であろうと予想する内容と話し手の認識に何らかのズレが存在する場合、それに起因する疑問を払拭するために、「知識の確認」を行うこととした。

第4章では、第3章で立てた仮説に基づき、推論を伴う知識確認形式の「ハズダ」の使い方について検証を行った。推論を伴う「知識の確認」の場合、その知識の確認の引き金になる話し手の疑問には、(1)話し手の知識と現実とのズレが認識される場合、(2)まだ実現していない未確認領域に対する単なる疑問の場合があること、その疑問が強く意識されればされるほど「ハズダ」は使いやすくなることを指摘した。このことから、「ハズダ」の意味・機能は、関連ある知識を使い、再び推論過程を経て行う知識の確認であることがより明確になった。

第5章では、推論を伴わない知識確認形式の「ハズダ」の使い方について検証を行った。

推論を伴わない「ハズダ」における知識の確認は、知識そのものの真偽が問われ、話し手が保持している知識との何らかの認識的なズレが強く感じられることが特徴だとし、①知識と現実や話し手の内部で疑問を持たせるようなズレが対立事項として存在する場合の知識の確認、②話し手の予想・期待と現実との間にズレが生じる場合の知識の確認、③反事実的な内容を述べる時の知識の確認があることを指摘した。その結果、「ハズダ」は他の概言の形式と異なり、話し手が持っている知識から生じる疑問を払拭するため、話し手なりの知識の検証の過程を表すことから、反事実的な意味も表すことができること、認識的ズレから生じる話し手が抱く疑問に対して、話し手自身が自問自答するという機能を果たしていることを明確にしている。さらに、推論を伴うか伴わないかは「ハズダ」の本質ではなく、疑問を払拭するための知識確認において当該の知識だけが問われる場合ならば、推論を伴わなくてもよいことを指摘した。

第6章では、知識確認からの派生的な機能について述べており、命題完成のために欠けている

部分の知識の確認や「ハズダ」の否定形、さらに語用論的な hedge としての使用について分析を行った。これらの用法についても、これまで述べてきた「ハズダ」が知識確認形式であるという観点から、すべて説明可能であることを論証している。

第7章では、類似する意味・機能を持つ「ダロウ」「ニチガイナイ」と「ハズダ」を比較し、現代日本語における「ハズダ」の位置付けについて考えている。考察の結果、「ダロウ」は話し手が持っている知識を意識するものの、その真偽を問わず保留する形式であること、「ニチガイナイ」は話し手の確信的な判断を表すのが基本的機能であること、「ハズダ」が知識の確認を表すことから様々な機能を持つものに対して「ダロウ」と「ニチガイナイ」にはそのような機能の広がりがないことを確認した。

第8章では、類似する意味・機能を持つ韓国語の「-(u)l kesita」と「ハズダ」を比較・分析している。その結果、日本語の「ハズダ」は知識確認という機能を持っているのに対し、韓国語の「-(u)l kesita」には知識を確認する機能はなく、すでに話し手が保持している知識やつもりなどを、未確認領域に投影させることで、それが「実現する」と判断したり、これから「実現する」という話し手の意図を表したりすることを明らかにしている。さらに、日本語の場合は、確信の度合いから「ハズダ」と「ダロウ」が使い分けられているのに対し、韓国語の「-(u)l kesita」は文脈によって確信の度合いが決まることを指摘するなど、本論文で用いた分析の観点が、多言語の分析の方略として有用であると述べている。最後の第9章では、これまでの考察、本研究の意義と今後の課題・展望についてまとめている。

本論文の特徴は、大きく3点あると考える。第一は、従来様々な研究がなされながらもその全体像が明確でなかった「ハズダ」という表現を、「知識確認」という観点から統一的に説明した点である。推論を伴う場合、伴わない場合、さらには派生的な用法についても綿密に考察し、それらすべての用法において、統一的で整合性のある説明が可能であることを示した。このことは、日本語のモダリティ表現の分析において新たな観点を示すものであり、他の表現の分析にも影響を与えるものである。

第二は、「ダロウ」「ニチガイナイ」という「ハズダ」と類似する意味・機能を持つ形式も合わせて取り上げ、それらの形式との比較から「ハズダ」の意味・機能を明らかにしている点である。「ハズダ」は「ダロウ」「ニチガイナイ」と共通する特徴を持ちながらも「知識確認」という機能により、他の形式にはない用法を持つことを明らかにした。この結果は、本論文の分析が「ハズダ」だけでなく、他の形式の分析および相互の違いを明らかにする上で有効であることを示している。

第三は、類型論的な観点から「ハズダ」と韓国語の「-(u)l kesita」の対照を行っていることである。異なる言語の表現を扱うことにより、本論文の分析が他の言語を分析する際にも有効であることを示した。日本語の分析にとどまらず、通言語的な視点で議論を展開しようとしている点は、本論文の価値を高めるものである。これらの特徴により、本論文の成果は日本語学、韓国語学はもちろんのこと、言語学の分野において大きく貢献するものである。

審査においては、「知識の確認」の有無やその対象についての説明が不十分な箇所があること、記号や図式についての説明が十分になされておらずわかりにくい箇所があること、使用している用語に不統一が見られること、「ハズガイナイ」と「ナイハズダ」の違いなどさらなる分析が必要な箇所があること、などの指摘もなされたが、それらが本論文の価値を損ねるほどのものではないことが確認された。

したがって、本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。